

□ レコード (CD&DVD)

諸石幸生

レコードの世界は、かつてないほどの不況に襲われていると言われて久しい。確かに、2011年の東日本大震災以来、コンサートの会場は空席が埋まらないと言うし、全体に気分が落ち込んだままだと言われている。レコード界も似たようなものである。

但し、昨年のクラシックのCDのリリース状況を見る限り、そうした指摘も当てはまらない。実際に昨年1年間のクラシックのCDの総発売数を見てみよう。

	新譜	旧譜 (再発)	計	2015年
交響曲	119	123	232	382
管弦楽曲	53	90	143	242
協奏曲	70	62	132	215
室内楽曲	97	0	167	129
器楽曲	285	127	412	428
オペラ	12	20	32	32

といった具合である。確かに、総数は2015年に比較するとやや減少傾向にあることが確認されるが、総発売点数はそれほど変化していないことがわかる。むしろ、器楽曲の部門などは数が充実している。但し、そこには日本の演奏家が、自主製作したものなどが数多く含まれており、従来の基準とは相容れないものがあると思われる。またオペラ部門で12の新譜とあるが、この内、オペラの全曲盤と言えるのは6点のみである。もともと、ビデオ・ディスクでは、35点近くの新譜のリリースがあった。すなわち、オペラに関してはビデオによる鑑賞へと変わって来ているということであろう。

こうした中で、第55回の「レコード・アカデミー賞」が決定された。

「大賞金賞」に、クルレンツィス指揮、チャイコフスキー：交響曲第6番短調「悲愴」となった。管弦楽はムジカエテルナという2004年に設立された新しいオーケストラである。

「大賞銀賞」には、オペラ部門から、モーツァルトの歌劇「ドン・ジョヴァンニ」(全曲)と決定されたが、何と、クルレンツィス指揮ムジカエテルナによる演奏である。クルレンツィスについては、近年評価が高くご存知の方々も多いものと思われる。この「レコード・アカデミー賞」においても、彼の指揮による録音は、2010年度の「交響曲部門」を受賞しているし、昨年度は「協奏曲部門」でも受賞している。

このように一人の演奏家に票が集まる現象は、近年顕著になってきた傾向のように思われる。クルレンツィスは、1972年ギリシャに生れており、サンクト・ペテルブルク音楽院で指揮法をイリヤ・ムーンシンに学んでいる。いずれにしても、近年の評価には目覚ましいものがあり、今回のダブル受賞も納得していただろう(以上レーベルはソニー)。

「大賞銅賞」では、ルノー・カピュソンの「21世紀のヴァイオリン協奏曲集」となった。なんと、現代曲部門からの受賞である。リーム、デュサパン、マントヴァーニという現代の作曲家たちによる協奏曲であり、現代曲部門からの受賞という珍しいケースとなった(エラート)。この他、シャイア指揮スカラ座フィルハーモニー管弦楽団「スカラ座の序曲・前奏曲・間奏曲集」(デッカ)、ツインマーマンによる「ショスタコーヴィッチ・

ヴァイオリン協奏曲第1番、2番」(BIS)、イザベル・ファウストとメルニコフによる「フランク：ヴァイオリン・ソナタ」, 「ショーン；コンセル」(ハルモニア・ムンディ・フランス)、ツィメルマンのよる「シューベルト；ピアノ・ソナタ第20番、21番」(DG)、ルネ・フレミングによる「ディスタント・ライト」(デッカ)、モンテヴェルディの「聖母マリアの夕べの祈り」(グロッサ)といったところである。

勿論、この他にも注目すべきCDは数多い。まずは、プロムシュテットがライブツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団と録音したベートーヴェンの交響曲全集である。プロムシュテットは、この時、90才になろうとしていたが、実に見事な演奏を作り出している。それは、従来の演奏では、客観的な精度と情感の豊かさという、二つのものが、相反するものとして存在していたのに対し、プロムシュテットはその両サイドを追求するという至芸を持って実現しており、真の円熟期を実感させるのである。(キングインター)

そしてもう1点が、井上道義の「ショスタコーヴィッチ/交響曲全集」である。これは、2007年に行われたサンクト・ペテルブルクSOとのライブ録音を中心に、東京フィル、新日本フィル、名古屋フィル、そして、広島SOといった日本のオーケストラとのライブ録音で作られたものである。驚くべきことはその演奏内容であり、井上道義の確信に満ち溢れた指揮振りに、圧倒されてしまうのである(オクタビア)。さらに、飯森範親が山形SOと録音した「モーツァルト/交響曲全集」も快挙といえよう。これは、一人の日本人指揮者によって完成された初めての全集となるものである。(エクストン)

この他、過去の名演奏家たちの復刻ものでも大きな話題となったものがある。ロプロ・フォン・マタチッチがフランスのオーケストラに60年代に客演し、得意としていたブルクナーで名演を聴かせたもの(iNA)、クラウス・テンシュテットのライブ録音集(PROFILE)などである。さらに、ルーマニアのエレクトレコードが所有していた、ローラ・ボベスコの若き日の名演を3枚のCDにしたものや、ドイツの女性ヴァイオリン奏者エディット・バイネマンの協奏曲を集めたCD (WEITBLICK) などである。

また、「配信によるクラシックの可能性」については、インターネットがこれ程普及している状況下、いわゆる「ハイレゾ音源」と呼ばれる高音質の音楽を自宅で楽しむということが出来るという点で、画期的なものである。CDとは異なり、廃盤がなく、24時間高音質の音源が手に入るというメリットがあるわけだが、現状はなかなか難しい。これは、ひとえに需要の少なさに起因していると思われる。需要が少なければ、運営の人員費、サーバーの維持費が重くのしかかってくるし、また、再生が簡便とは言えない状況も問題であろう。現状では、YouTubeで満足してしまい、購入しにいたらないことが、配信サイトの販売方法など、当初から指摘されていることが、依然、普及に弾みが見つからない原因になっているものと思われる。このように、CDをめぐる状況はますます混沌としているように感じられる。

私たちが親しんできたCDというメディアが、これから何年続くのか、さらに、もっと簡便にして高音質のシステムが開発されていくのかなど、先が読めない状況である。だが、私たちと音楽は、切っても切れない関係にあるということを、原点として考えていけば、どのような事態になろうとも、私たちの行く方向を楽天的に見ていけるように思う。確かに、ハイレゾ音源に対する期待感や、ブルーレイディスクに対する期待感、そして、SACDの普及といった課題は山積しているようだが、その一方では、かつての名演をレコードで聴きたいという需要もあるという。こうした多様なニーズに答えていきつつ、私たちは、感動できる音楽との出会いを求めているのである。